

恵器の蓋坏である。坏蓋は口径13.6cm、坏身は口径12.2cm。6・7は瑪瑙製の勾玉である。7は研磨・穿孔が不自然であるが、箱書きとおり昭和38年出土品とすると、出土後に研磨したのと考えられる。9は鉄刀である。接合する長さは61cmであるが、破片を考慮すると80cm以上になるものと推定される。

磯の浦4号墳は立地としては3号墳より良好な位置をしめており、県道粉河加太線の建設に伴いカットされた地点に存在した可能性はあるが、現在は存在を確認できなかった。

他に古墳の想定される地点として、須恵器散布地がある。付近をピンポールで突いて地表下の状況を把握するべく努め、可能性のある地点にB・Cトレンチをあけたが、古墳は確認されなかった。古墳の主体部の陥没を利用して軍用の収蔵庫・弾薬庫を造ろうとした例^⑨もあり、トーチカの建造された地点に古墳が存在した可能性も考えられる。

(2) 磯の浦周辺における本土決戦準備について

サイパン島、硫黄島、沖縄戦へと戦局が悪化してくる中で、連合軍が大規模に本州分断作戦を実施する場合、京阪神と名古屋の攻略が企図されるものと考えられた。和歌山県においても、護阪部隊と呼ばれた第144師団が連合軍の上陸が予測される地点を重点的に陣地構築を急ぐようになった。昭和20年4月に「決号作戦準備要綱」が発令され、磯の浦周辺にも陣地が構築された^④。

紀ノ川北岸では二里ヶ浜への連合軍の上陸が想定されており、これに対する艦船砲撃の役割を担った陣地が①の重砲陣地であった^⑤。昭和20年2月11日に通称中部第75部隊が陣地構築を開始し、終戦までに約90%完成したらしい。この部隊は口径15cmのカノン砲二個中隊編成であり、①の山塊南山麓には6～8mの平坦地が2ヶ所造成されている。平坦地の周囲は2mから7・8mある切り立った崖となっており、前方も1.5mほどの土手となり、山麓からの入口は屈折している。背後の崖面は土砂で埋没しているが、おそらくカノン砲を収納するための壕が掘られているものと推定される。

重砲陣地を防禦するため、重砲兵中隊が菖蒲山を含む磯の浦の山塊に陣地構築を行い、144師団の歩兵415連隊第1大隊が調査地北東の通称陣台山（現在のつつじが丘付近）から前山にかけての陣地構築を担当した。

重砲陣地①を防禦するものとして、②の重機関銃陣地、③の野砲陣地、④の曲射砲陣地が構築されている。現地を踏査していないので位置や射線方向を確認していないが、②は重砲陣地方向への背面砲撃を、③は菖蒲山の北方あるいは南方を侵攻する戦車への攻撃を、④は現在南海加太線の通る谷方向への砲撃を意図したものと考えられる。今回調査したトーチカを含む本協所在のトーチカ群は、その構造から軽機関銃を据えることのできる施設と位置付けられる。銃眼の向きから、①～④を補完し、主に粉河加太線から重砲陣地へと侵攻する兵士を狙撃するものと考えられる。また、二里ヶ浜の砂堆上には水際陣地としてトーチカが造られており、砂堆を切って北上

する道路沿いに近年までコンクリート製のトーチカが残存し狸の棲家となっていたらしい^⑨。

本脇（旧西脇野村）所在のトーチカ築造時の状況は、7月9日の和歌山大空襲後、実際に現地で作業に携わった女学生の方々^⑩の記憶をもとに再現すると次のようであったと言う。まず朝は8時に二里ヶ浜駅前の学校へ集合し、兵士と合わせて4名程度の班を編成して連日異なる陣地を構築にゆく。兵士がダイナマイトで発破をかけ、ツルハシ、スコップで土をほり、それを女学生がもっこで運び出す。ちなみに今回の調査現場の坑道を掘った土は、トーチカ側から運び出して、西側の谷へ捨てたらしいので、トーチカの南側に伸びる道はこのときの作業道であろう。坑道を掘ると松の板を組み、釘・鋸を用いて固定したものとみられる。そして坑道の入口にはアオキを植えたりして、目立たないようにしていたという。今回調査を実施した坑道においても、柱を建て、板天井を張り、土を被せて、坑道入口をカムフラージュしたのではないかと推測される。作業は終戦の日まで続き、今回調査したトーチカのみが完成、そのほかの地点は50～90%の完成度であったらしい。

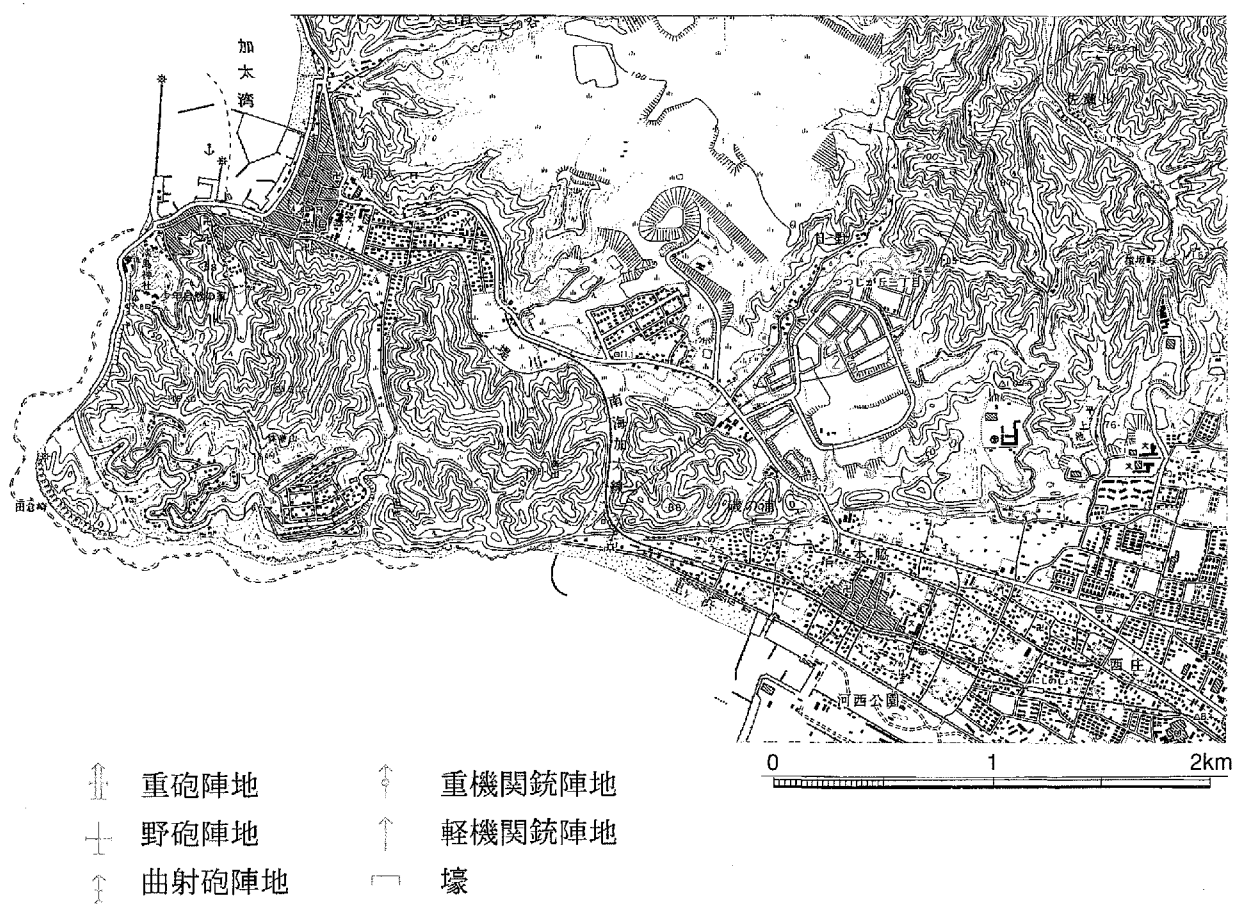


図11 磯の浦周辺の本土決戦準備